

通常の印刷よりも四倍近く細かな網点技術で知られる文化堂印刷の工場は、小田原市にある。写真集のしごとではしばしばこの会社を指名する。製作過程で何度も試し刷りを重ね、本番の印刷では、工場に向いて、インキの盛りぐあいなどの最終決定（刷出し立ち会い）をする。

多くは、朝、新幹線で小田原に赴き、立ち会いが長引くばあいは昼食をご馳走になる。営業担当者が、クルマを走らせながら市中を案内してくれる。「この蒲鉾店前の駐車場が、箱根駅伝の中継所に使われるんです」、さらに「この道を一ツツと、あそこに見える山のとつぺんまで走っていく」と付け加える。そう広くはない幅の車道が、山の方角にうねうねと伸びていく。この急斜面を走りつづけるのか、と嘆じてしまう。

この正月は、神経痛の治療をかねて、長野県の温泉場でのんびりした。1月2日の朝、ニュースのあとテレビのチャンネルを切り替えると、箱根駅伝のスタート間近だった。多くのひとがそうであるように、つい見つけすぎてしまった。やがて、「あの場所だな」と思える風景が画面に映しだされる。印刷会社のひとに教わった地点だ。だが、違和を感じる。路面の傾斜がテレビからは伝わってこないのだ。アナウンサーや解説者の話からは、いま

ランナーが喘ぎながら急峻な坂道を駆け登っていると理解し、沿道の家屋や電柱からも傾きは推測できるが、指さされて眺めたときの、「この坂を走って登るのか」とのおのきは伝わってこない。わたしは、坂道を了解しているだけだ。

映画関係者からも、「映画は、坂道と雨は写せない」と聞いた。坂道だと知らせるには、息を弾ませる老人を写したり、水平や垂直のものとは対比させるほかはない。雨も、小糠雨でいどならフィルムに定着できず、いきおいシーンは豪雨になりがちだ。機械によって捉

映像を疑うレッスン

えられた映像は、遠近それ自体も伝えない。見る者は、「霽がかかって輪郭がぼやけているから遠景なのだろう」と先回りして理解している。3Dは、遠近を伝えられない映像が希求せざるをえない技術なのだろう。

先ごろ亡くなった写真家・東松照明さんが、こんな証言をしている。「太陽の鉛筆」シリーズを沖縄で撮影していた東松さんは、撮影の際、写っている人物に写真を手渡すように心がけた。もらった当人は写真をうれしそうに上げしげと見る。「そばに寄ってふっと見たらタテヨコを逆にして見てるわけです。そ

れが一人だけではなく、何回かそれにぶつかった」（森山大道との対話「写真のなかの「私」をめぐる」、森山大道『過去はいつも新しく、未来はつねに懐かしい』青弓社、2000年）。本人たちは、そこに写っている映像が自身だとはわからなかった。いまからさほど遠くはない1970年前後のできごとである。

見る者は、映像があるがままに受容しているのではない。学習の結果、映像から意味を読みとっている。そんなことを考えながら、書評新聞を読んでいたら、評論家で詩人の谷川雁が「世界の映像を裏返さないかぎり、永久に現実を裏返すことはできない。イメージから先に変れ！」と書いているのを知った。映像が、現実を確固たるものに思わせていないか。谷川は、この文章をこう結んでいる。「凡百の唯物論に対立するものであるうとも、民衆にとつて変革の正当な順路というものは物質的条件が変るまで待つことでは断じてない」（『幻影の革命政府について』、初出は1958年。『原点が存在する』思潮社、1969年）。映像を疑うレッスンが必要だ。

連載エッセイ 第33回

鈴木一誌

（すぎ・ひとし／グラフィック・デザイナー、題字デザイナーも筆者）